

第百七十四回 参議院政府開発援助等に関する特別委員会会議録第四号

平成二十二年三月十日(水曜日)
午後一時一分開会

委員の異動

二月二十四日
梅村 聡君 補欠選任
外山 齋君 補欠選任
二月二十五日
木村 仁君 補欠選任
三月九日
鈴木 政二君 補欠選任
三月九日
木村 仁君 補欠選任
藤末 健三君 補欠選任
藤末 健三君 補欠選任
藤末 健三君 補欠選任

出席者は左のとおり。

委員長

理事

委員

岩永 浩美君
犬塚 直史君
富岡由紀夫君
堀井由美子君
橋本 聖子君
松山 政司君
浜田 昌良君
小川 敏夫君
大久保 勉君
加藤 敏幸君
風間 直樹君
金子 洋一君
行田 邦子君

事務局側

常任委員会専門員
常任委員会専門員
参考人
長崎大学熱帯医学研究所国際保健学分野教授
ソニー株式会社
CSRR部統括部長
富田 秀実君

本日の会議に付した案件
○理事補欠選任の件
○政府開発援助等に関する調査
(ミレニアム開発目標の達成状況と我が国ODAの役割及び我が国ODAと民間活力の活用に関する件)
○委員長(岩永浩美君) たいだいまから政府開発援助等に関する特別委員会を開会をいたします。
委員の異動について御報告をいたします。
昨日までに、外山齋君、梅村聡君及び木保佳丈

第二十二部

政府開発援助等に関する特別委員会会議録第四号 平成二十二年三月十日【参議院】

第二十二部

政府開発援助等に関する特別委員会会議録第四号 平成二十二年三月十日【参議院】

後にしておりました。ハイチを出た後、外務省国際協力局で三年間働いた後、現在、長崎大学熱帯医学研究所に勤務しております。
長崎大学の熱帯医学研究所の中の国際保健分野というのには、ここに掲げている三つの柱を重要な柱として設定しております。まずは研究でございます。これは後で少し簡単に触れますが、これは、感染症の進化・適応とか環境医学とか医療衛生学というものを制とベシクな面から研究をしていく。教育、修士課程、博士課程を中心に大学院教育をやっていると同時に、社会貢献をやろうと。国際保健分野であるから、その社会貢献は当然国際貢献になるということで、この分野においては公共政策への提言あるいは現場での活動、人づくりなどを行っているということになっております。

研究活動ですが、私たちの研究室には三つの研究ユニットがあって、一つ目は環境と健康ということを研究しております。これは、気候変化あるいは気候変動と健康の関係をグローバルに見ていくという研究でございますし、もう一つは黄砂と健康ということで、中国大陸を中心に発生する黄砂の健康影響についての評価を行っているということ。

第二の研究は、医療生態学的研究と称しております。これは、感染症というのは微生物と宿主の相互作用の結果として表層に現れる現象でございますが、我々は感染症をいつも人の視点からのみ見ているという反省に立って、感染症そのものを、例えばマラリアを起す原虫、あるいは Dengue 熱を引き起こすウイルスの側から見ればどのような見えるのだろうか。そうした視点から感染症を例えれば見えていた場合に、我々が持っている感染症対策は果たして生態学的に妥当なのかどうかといったことを評価していく、研究していくという分野でございます。

最後は進化生態学と感染分子進化と書いておりますが、これは HIV あるいは HIV と非常に似たウイルス感染症である HTLV-I、あるいは結核

君が委員を辞任され、その補欠として風間直樹君、武内則男君及びツルネンマルティ君が選任をされました。

○委員長(岩永浩美君) 理事の補欠選任についてお諮りをいたします。
委員の異動に伴い現在理事が一名欠員となっておりますので、その補欠選任を行いたいと存じます。御異議ございませんか。
〔異議なしと認めます。〕
○委員長(岩永浩美君) 御異議ないと認めます。それでは、理事に松山政司君を指名をいたします。

○委員長(岩永浩美君) 政府開発援助等に関する調査のうち、ミレニアム開発目標の達成状況と我が国ODAの役割及び我が国ODAと民間活力の活用に関する件を議題といたします。
本日は、長崎大学熱帯医学研究所国際保健学分野教授山本太郎君及びソニー株式会社CSRR部長野村長富君が参考人として御出席をいたしております。
この際、参考人の方々に一言ごあいさつを申し上げます。
本日は、御多忙のところ当委員会に御出席をいただき、誠にありがとうございます。
参考人の方々に忌憚のない御意見を拝聴し、今後の調査の参考にしたいと存じますので、よろしく御願いいたします。

議事の進め方について申し上げます。
まず、山本参考人、野村参考人の順序で一人二十分程度御意見を述べいただき、その後、各

止ということを通して、世界の中から極度の貧困や飢餓の根絶に貢献しよう、あるいはその研究を通して環境の持続可能性についての提言を行おうということを考えているわけでありまして、
そのミレニアム開発目標でございますが、成立の背景に一つの国際的な状況があったと考えております。

それは、貧困や飢餓が許容し難い人道上的問題という認識が一九九〇年代の後半から二〇〇〇年ごろにかけて出てきたと同時に、九・一一のテロ、あるいはアフガニスタン、小規模紛争の原因が貧困にあるという認識も共有されてきた。こうした貧困の問題に取り組むことなく、テロや小規模紛争は恐らくなくならないという現状認識をみんなが持ち始めたというのがミレニアム開発目標の背景にあったのではないかと考えております。

しかし、そのミレニアム開発目標に関する達成状況は必ずしも順調ではありません。これは一日一・二五ドル未満で暮らす人々の割合を示したものでございますが、サハラ以南アフリカ、南アジア、西アジアといった国々では、ミレニアム開発目標の達成状況は、目標に達成できる状況にはなっていないふうになっております。東アジア及び東南アジアを中心にミレニアム開発目標の達成が進行表の上で達成がきているところという地域がある一方、サハラ以南アフリカや南アジアでは達成が困難であると考えられています。また、西アジアや中央アジアと呼ばれる地域では、この二十年間、逆に状況が悪化しているという現状も見られていくわけでございます。

こうした、特に貧困が激しい地域あるいは小規模の紛争が起きている地域においてミレニアム開発目標の達成が困難であるということが、成立の背景から含めて考えても非常に大きな問題であると考えております。
そうしたミレニアム開発目標の達成に関して、欧米は、現在資金量を非常に重視した議論をしていくと、GNI比で〇・七のODAがあれば目標は達成できるという意見がかなり強い意見となつていて、一方、そういう意見がありつつも、資金量だけでは達成は難しいのではないかと議論も現在行われているところだと認識しております。

ういっただとこの社員などから寄贈の本を集めてこのSAPESIという団体に寄附をしていくと、こういった活動をしております。また、本社の方からは、南アフリカには現地語として全部で十一か国の言葉が話されていて、英語も含めまして、十一か国語ありますが、現地語の書籍が非常に少ないという問題点もありますので、ここはある

力、サツカーに限らずスポーツイベントが国屋に与える勇氣と希望といえますか夢ですね、これでも非常に大きなインパクトがあるというふうな感じしておりますので、それだけでも十分に意味のあるプロジェクトだとは思っておりますが、それに加えまして、いかにこのミレニアム開発目標に貢献するかと、これをうまくやっていこうという

りますが、このドラマの実演であるとかクイズ大会とかサツカー大会、こういうことをやりながら学んでいくということがありまして、最後ちよど暗くなったときに屋外でのパブリックビューイングですね、サツカーの映像の提供をいたしますので、これで見えていくと。こういうことで、この過程を通じて、この右下の写真に

プロジェクトですとかサッカーのコンテンツといったものをうまく有効活用することによってこういった分野でもミレニアム開発目標に貢献していくとある種証明されたのではなかつたかというふうに思っております。

この成功を受けまして、本年開かれますFIFAのワールドカップの期間中、今回はJICAの

ん並びにUNDPさんとも連携させていただきまして、ガーナとカメルーンにおいて同様のプロジェクトを実施する予定になっておりますので、御興味のある方は是非とも御参加いただければと思います。

最後に、BOPビジネス、最近ちょっと話題になっているベース・オブ・ザ・ピラミッドという、いわゆる途上国の貧困層に向けたビジネスという話題についてちょっと触れさせていただきます。

このBOPのビジネスでは、最近の議論では、特に貧困層から搾取するというよりは、ビジネスを通じて社会の開発効果も同時に実現していくような形の新しいタイプの途上国ビジネスというふうな位置付けられておりまして、日本の国内におきましても様々な企業や経済産業省、JETRO、JICAさん等々現在研究が進んでいるというふうな認識しております。

昨年、ちょうど経済産業省様の委託事業としてBOPビジネスのフィールドリサーチ調査の公募がございまして、十件が選ばれたわけですが、その中で二つのテーマも採択をさせていただきました。私も含めてメンバーが実際にインドの農村部の電力状態の調査などをして農村部での民家の宿泊等も含めたプログラムでこのスタディーをさせていただきまして、やはりこういった意味で現場のニーズをきちんと的確にとらえていくというのはこのBOPビジネスの展開には非常に重要な要素だと思っております。こういった委託事業、政府からの委託事業という形で支援というのは非常に有り難いというふうに感じた次第でございます。

簡単にまとめさせていただきますが、特にミレニアム開発目標のようなものを意識しますと、やはりこのパートナーシップというのが非常に我々常日ごろ重要だと考えておりまして、政府、企業並びにNGO、こういった様々な得意分野を持つプレイヤーがうまく連携することによってより効果的な支援が可能になるのではないかと考えております。

第二十二部

政府開発援助等に関する特別委員会会議録第四号 平成二十二年三月十日【参議院】

ふうな考えております。

またさらには、特に企業の視点ということに關しましては、国際開発分野でも企業は非常に様々なオポチュニティーがあるのではないかと、うな思っております。特に企業が持っています多様な技術力などの資産というものはこういった分野において非常に有効なツールとなるというふうな言えるのではないかと考えております。

また、CSR分野における官民連携ですとか、BOPビジネスの支援、最先端技術のODA活用などを通じて企業の積極的な関与ができるような形になれば、加速、こういった開発分野での貢献、ひいてはミレニアム開発目標の少しでも達成に近づくという意味での大きな力になるのではないかと、簡単に考えております。

以上、簡単にですが、私の方からの御報告とさせていただきます。どうもありがとうございます。

○委員長(若永浩美君) ありがとうございます。

以上で参考人からの意見の聴取は終わりました。

これより参考人に対する質疑を行います。

参考人に対する質疑を行う際は、御起立の上、御発言ください。

参考人の方々の御答弁につきましては着席のままで結構です。

また、各委員の発言時間が限られておりますので、御答弁は簡潔にお願いいたします。

それでは、順次御発言願います。

○金子洋一君 民主党・新緑風会・国民新・日本所属の金子洋一でございます。

今日は、山本さん、富田さん、大変にお忙しいところをおいでをいただきまして、本当にありがとうございます。また、非常に参考になる、なかなか私もこういったところで活動しておりますけれども容易には分からない側面についてお話をいただきまして、本当に勉強になりました。

第二十二部

政府開発援助等に関する特別委員会会議録第四号 平成二十二年三月十日【参議院】

で、その範囲内でお二方に御質問させていただきます。

まず、順番から申しまして、山本さんにお尋ねを申し上げます。

今回、山本さん、被災直後のハイチにお入りになつて様々な医療救済活動にお取り組みになったということ、またその報道などにつきまして私も私ども勉強させていただきまして、そういった中で医療活動を各国ともやってこられた。その中で、山本さんいろいろな面、御自身でこれまで御経験をなさつて、ハイチにも一年か二年間おいでになつて、想像されていたような面もあるでしょうし、また違った面もあったらどうかと思っております。

そうして、今回の被災後の救済活動で得られた教訓、我が国に対する教訓、あるいは世界、ほかの国に対する教訓といったようなものを御教をいただければというのがあります。第一点の御質問でございます。

第二点の山本さんに対するお尋ねでありますけれども、今、ミレニアム開発目標について御説明をいただきました。様々な項目がございまして、ハイチ、大体拝見をしております。これはアマリティア・センが言っております。ベシクエンタイトルメントとかなり重なつてくるのではないかなと思われました。環境の部分というのはちよつと違うのかなとも思いますけれども、それ以外の部分、極度の貧困からの脱出ですとか、あるいは識字率を上げるですとか、そういったことについてはかなり重なつていっているように思えます。

こういった面、ハイチというのは西半球の最貧国と言われるわけですから、非常に欠けています。そういったところの欠けていいることが今回の数千十万人お亡くなりになつていいると言われている状況の下での負傷者、被災者の被害の拡大をもたらしている面があるのではないかと考えますけれども、こういった面について山本さんのお考えをお教をいただければと思います。

富田さんにつきましては、また後ほどお尋ねをしたいと思ひます。

○参考人(山本太郎君) どうもありがとうございます。二つの質問だと思ひます。

まず、第二の質問のハイチあるいはハイチを含む最貧国と言われる国、地域で欠けているものが何かという質問についてですが、私自身、貧しい地域あるいは開発途上国と言われている地域において一番欠けているものはリジリアンズという、何というんでしょうか、ゆとりというか、災害事象あるいは感染病、ある通常想定しないことが起こつたときに、そこからの復元をする力という、その総合力が多分欠けているのだらうと。そういった総合力が欠けている理由の一つに貧しさがあり、教育が行き渡っていないということがあり、女性の差別がありということなんじゃないかと考えております。

第二のハイチの今回の地震あるいはそれに對する支援からの教訓について言えば、これはまさに、何が教訓かをこれから我々がもう一度考え直していくべき必要があるのかなというふうに考えております。

東大震災を除くと、首都直下型の地震というのは今回が初めてだったんだと思ひます。ただでさえ政府機能が弱いところに向けて首都が被災をした、政府自身の非常に脆弱な中で緊急支援あるいは復興支援に対するロードマップを書かなければならない。

基本的に、私は、国際協力というのはその国の自立的な支援を側面からサポートするということが非常に重要だと考えているのですが、その自立する主体の部分が今回は非常に大きなダメージを受けた、その中でその支援を国際社会はどういうふうに行うのか、そこを考えると必要があるというところが一番の教訓になるのではないかと考えております。

第二十二部

政府開発援助等に関する特別委員会会議録第四号 平成二十二年三月十日【参議院】

第二十二部

政府開発援助等に関する特別委員会会議録第四号 平成二十二年三月十日【参議院】

たいと思ひますが、続きまして、ちよつと富田さんの方にまずお尋ねをさせていただきますと思ひます。

まず、この一ページ目の、ソニーの目指すCSR活動ということで図表を示していただきました。

持続可能な事業活動あるいは持続可能な社会への貢献ということで、様々な取組を行つていて、最終的にステークホルダーからの信頼を得るということとございまして、ステークホルダーと申したときに、会社の場合ですと、やはり第一に頭に浮かびますのが株主であると思ひます。特に、最近ですと、株主の主張と申しますか、会社はだれの持ち物であるのかといったような問いから様々な動きが見られております。特に、このところ、食料品関係の会社ですけれども、委任状争奪戦などが行われるというような話も承つております。

というところで、ステークホルダーと申したときに、会社にとって一番大切なであろう株主に対してどういった形で説得をしていくのかということについてお尋ねをしたいと思ひます。

特に、BOPなどで、ベース・オブ・ピラミッドを対象にしたビジネスで申しますと、例えばパングラデシュでダノンが一個八円のヨーグルトを販売をしている。報道によりますと、二〇一一年に黒字に、単年度黒字化がなりそうだということでありまして、それまでに投資した総額というものが二十六億円だということで、リターンとしては極めて微々たるものだということだと報道をされております。となりますと、そういったリターンとして極めて微々たるものをついていく上で、株主にに対してどういった形で具体的に説得をされているのか、あるいははされていくとお考えになつていられるのかということをお尋ねをしたいと思ひます。

二点といたしましては、このプロジェクト実施概要、六ページの上の方のこの写真にも小さく載つておりますけれども、二百インチなんですよ。

うか、この大きなスクリーンの左上の方にSONY Yと入つております。もちろん株式会社です。からこういった広告を打つていかなければならないはずなんです。このプログラムを拝見して、いままとも、なかなかソニーが頑張つてやっていますよという感じが分かります。感じがいいたすので、この事業、あるいはほかの事業でも結構なんですけれども、現地の国で自社ブランドの評価を高める方法について、既にいろいろ工夫をなさつていられると思うんですが、具体的にどういふふうに工夫をなさつていられるのか、あるいはこれから展開をされていくとしていられるのか、あるいは社内、いや、ちよつとそれは足りないんじゃないかというような議論があるのかとか、そういった辺りについてお教をいただければと思います。

○参考人(富田秀史君) 二つ御質問をいただきました。どうもありがとうございます。非常に難しい御質問かと思ひますが、まず一つ目のステークホルダーの部分でございまして、特に私ども、CSR活動という観点に立ちますと、ステークホルダーは株主や投資家に限つたものではなくて、もちろん顧客、お客様でありますとか社員ですとか政府機関、NGO、こういった多様なステークホルダーの皆様に、こういった形でいかに信頼を得るかといった観点で取組を進めておりますので、そういう意味では、様々な価値観の異なるステークホルダーの皆様、どういふふうなそれぞれの興味、御関心を理解しながら取り組んでいくかというところを我々常々考えているところでありまして。

実際、株主、投資家というステークホルダーにいかにか説得していくかという観点に關して申しますと、まず一つ、最近の注目すべきトレンドといつたしましてSR、社会責任投資家といった一部の投資家グループが、従来のように企業の財務的なパフォーマンスだけではなくて、いわゆるCSRのバフォーマンス、社会や環境への配慮、こういったものを積極的に投資の評価に取り入れていくといったグループが徐々に増えてきています。

これは特にヨーロッパなんかを中心に増えてきていいるというふうな理解をしております。こういった特に投資家、株主の方々に關しましては、このCSRの活動自体が直接的に大きなプラスポイントとして評価していただけるということになるかと思ひます。

ただ、当然株主、投資家の皆様はすべてSR、利益面に関心のある投資家の方々ということに關しまして言うと、このCSRの活動、こういったものは確かに直接的な売上上げに貢献するといったものではないかもしれませんが、こういった活動を通じてソニーという企業のブランド価値の向上というのに当然寄与すると思ひます。こういった活動を通じて社員のモチベーション、こういったところ、またさらには優秀な人材の獲得、こういった活動にも寄与します。また、ひいてはこういった活動を通じて新しいイノベーションが起こつていく、こういったところから、ある程度、中長期的な観点から見れば、適切にこういったところに投資していかないと、逆に株主価値を損ねてしまつたという結論も結びついてしまうのではないかと、いふふうに考えております。

それ、二点目ということに關しましては、今回例えればこのプロジェクトを実施いたしましたガーナなんという国では、私どもの販売拠点というのでもまだ現在はない時点でありまして、一種、当然幾つかの電気店等では我々の製品も並んでおりますが、まだ特にマーケティングという観点からは大きなブランディング活動を行うという段階には必ずしも達していない地域に属するかと思ひます。実際、そういった地域こそ今日のテーマでありますミレニアム開発目標の課題が山積してある地域ということでありまして、逆にそういった地域においては、極端にブランディングといったところを前面に出すよりは、やはりそういった基礎的なところをきちんと貢献させていいたところ、ひいては中長期的にその国が発展して

ていったときにその国にとって非常に重要なブランドになるのではないかと、いふふうに考えております。

○金子洋一君 ありがとうございます。なかなか、まだガーナにおかれても最初の一步を踏み出しただけだということ、これから様々な取組を通じて広めていかれたというふうなところなんではないかと受け取らせていただきました。

それでは、山本さんにまた先ほどのお尋ねの続きで質問をさせていただきます。

先ほど、リジリアンズが欠けているということが大変に大きな問題ではないかとおっしゃいました。確かに、ミレニアム開発目標の項目の中でそういったことがちゃんと高まつていけばリジリアンズも増えていく、強化されていくという感じがいたします。

一方で、お話の中にもありました、山本さんの六枚目にミレニアム開発目標達成状況ということでもうごさいまして、東及び東南アジアを中心に行程表に載つていいる地域もあれば、サブサハラや南アジアあるいは西アジア、中央アジアでは状況が余り良くないということでもあります。

こういった地理的な状況を見てまいりますと、もちろん開発援助と申しますと非常に短期的な援助のことをどうしても思ひ浮かべがちななりますけれども、内在的な経済発展の有無というのにも非常に大きく影響をされているのかなという気がいたします。

そこには日本の医療チームが入ったわけであ
りますが、当然、本来であればその国に機能し
ている病院があつて、そこに患者を搬送できたり
するんですが、今回はそれができなかった。そこ
で何をしたらいいかと申しますと、ハイチの国の医療
機関とそれができないとすれば、各国の医療援助
隊の比較優位をすることによって機能分化を少し
図つていったところがあると思います。それは非
常に良い点だったんだらうというふうに考えてお
ります。

具体的に申しますと、手術あるいは入院の施設
を早急に立ち上げたカナダ、アメリカの医療援助
隊に重傷患者の治療を任せ、逆に日本チームは中
等程度の外傷に対して対応していくというところを
行いました。二点目としては、一方で手術の施設を
持つてはいたアメリカ、カナダだったんですが、
検査施設、レントゲンであるとか超音波であるとか
といった検査に必要なものの機材が持ち込まれ
ておりませんで、それを持つていたのは日本チ
ームだけで、そうした検査に日本チームが素早く対
応していったという機能分化もございました。

困難な面は、先ほど言った、その国そのものが
後方支援をする病院を持たなかったという点でござ
いました。

○岡田直樹君 地震によるけがの対応に追われ
て、ハイチに多いHIVとか結核の患者さんの治
療ということが困難になったというお話もお伺い
いたしましたけれども、その辺りについても山本
参考人からお伺いをしたいと思つています。

○参考人(山本太郎君) 災害における外傷治療に
追われて、HIV、結核の対策が困難になったとい
うわけでは恐らくないと思つています。

まず、地震ですら、地震に対する急性期の対
応は重傷災害者に対する支援であることは間違ひ
ないんだらうと思つています。それをまず行つたとい
うのは恐らく正しい選択、選択という優先順位
の付け方であつたらうと。

ただ一方で、それさえすれば災害支援は終わる
第二十二部 政府開発援助等に関する特別委員会

のかといへば、そうではなくて、その背後にはH
IVとか結核といったそもそもの地帯からハイチ
に存在する大きな社会問題があるということが多
分忘れてはいけないということと同時に、救急、
急性期の災害対応をやりながら、そのHIV、結
核の対策をどういふふうに行っていくかというこ
とを考えると、実は、五年後、十年後にそうした
感染症が非常に悪化した状態に蔓延するといふ
危険性があるということになるんだらうと思いま
す。

○岡田直樹君 しばらく山本参考人に御質問を続
けたいと思つていますが、日本からこうしたH
IVや結核の感染症というふうなんでしょうか、そう
したものをこのハイチに供給して行く、こうい
う体制を強めるというのは一つのアイデアではな
いかと私は思つておられます、いかがでしょう
か。

○参考人(山本太郎君) まさに同感でございま
す。今後の復興の分野において、保健、医療の関
係では、HIV、結核を含む感染症、こういった
状況の中でさえいふと新しい命が生まれてきて
おります、そうした子供たちへの対策、この二つ
だろうと考えております。

○岡田直樹君 どうもありがとうございます。
私は、今回のハイチ大地震に際しての我が国の
援助隊の活躍というものを高く評価したいと思つ
ております。

ただ、日本の国として、政府として少し初動体
制が遅れたんじゃないかという、こういう話があ
ることも事実でありまして、日本隊が現地入りさ
れたのは地震発生から五日後でございまして、し
よか、これは、アメリカはもちろん、ハイチとの距
離が余り日本と変わらない、先ほど金子委員から
も御指摘がありましたけれども、中国と比べても
相当後れを取ることになったわけでありまして、日
本隊もアメリカで自衛隊機に乗り換えて精いっぱい
い急いで行かれたということでありまして、それ
も、やはり出だしが遅れたという感じが否めないん
じゃないかというように思つています。

第二十二部 政府開発援助等に関する特別委員会 平成二十二年三月十日 【参議院】

第二十二部 政府開発援助等に関する特別委員会 平成二十二年三月十日 【参議院】

報をすれば認知度が上がるかと、多分そういった
問題ではないのかなという気がしております。日
本の国民自身がどれだけ海外の事象に関心を持
ち、ということが結果としてミレニアム開発目標のよ
うなものに対する関心の高さに結び付いていくとい
うことなのかなという気がしております。そ
ういふ点に接して言へば、最近、私は大学で若い
人たちが接しているんですけれども、非常に内向
きの感覚が気になるところではございます。た
だ、とは申しつつも、若い人の内向きの感覚とい
うのは恐らく社会を微妙に反映しているものではな
いかというふうに思つておられます、そこは我々、
そういう社会を構成している者の責任もあるのか
なという気がしております。

ちよつと長くなるかもしれないんですが、昔、
母親に言われたことがあつて、私たちの若い世代
のときはあなたたちより確実に貧乏だった、今の
方が食べるものも着るものもいふ、だけれども
一つ違ひがあつて、それは、はじめにやつていれ
ば今日よりあしたは良くなるということに関して
はもう絶対的な信頼があつた。そういう社会の
中では、若い人は多分、冒険とかチャレンジング
であつても外に何の何かをしようというふうにな
る。それがなくなつたときにやっぱ内向きにな
る可能性はあつて、それが結果としてミレニアム
開発目標に関する認知度が上がらないとか、ある
いはODAに対する理解が進まない、ODAはま
だ減らした方がいいんじゃないかといった意見に
なつて出てくるのか、そういったことにつながら
ていくのかなと。

そういう意味では、我々がどう日本の未来を構
想してそれを国際社会の中に位置付けるかという
ことが、実はミレニアム開発目標も政府開発援助
も含めた大きな意味の中で必要になることなの
かなという気がしております。

○岡田直樹君 日本人のメンタリティーとかある
いは教育にも関する示唆に富んだお答えをいただ
きまして、ありがとうございます。

山本参考人に対する御質問の結びとして、ミレ

首都直下型ということでハイチの政府機能も麻
痺状態になつて、恐らく要請というものもなかつ
たのではないかなと、こういうふうな思つてわけ
でありますけれども、このような援助の迅速性につ
いて、今回のような実感を持たれたか、あるいは
今後どういふ教訓を的々取つていけばいいか、
山本参考人、お願ひを申し上げます。

○参考人(山本太郎君) 多分、これは意見が多々
あるもので、まさに私の個人的な考え方として感
じているところが多分正解がない話だと思つてお話し
させていたただきたいと思つてますが、まず、日本の
今回の援助が遅かつたかという、私自身は遅れ
てはいないというふうな認識しております。

それは、一つは、元々PKOに入つていて情報
を持つていた国と安全をまず確保して行かなけれ
ばならない状況にあつた国との違いがあると思ひ
ますし、あともう一つは、本場に多分想定外だつ
た事態が起こつて、本来であれば大使館が被災し
ても大使館は残つてバックアップ機能を果た
す、あるいはその逆というのか、そういう中での体
制ができるんですが、今回は大使館も大使館も
両方被災したといった部分等々があつた上であつ
た。その派遣を決めて、要請を取つて派遣を決め
たという時点においては、遅れはそんなになか
つたかなと思つております。

一方、中国が非常に早い時期に行つた背景に
は台湾との関係が確実にあるんじゃないかという
気がして、ハイチはさつと親台湾の国で、そ
こに向けて中国は何らかのさつと影響力を形に
見せる形で示したいという要請があつたのではな
いかなと思ひます。だから、ある意味では中国の決
断が逆にかなり早かつたのかなという気はして
おります。

○岡田直樹君 中国というのは大変分りやすい
国だということをお話されております。

この点については、外務大臣も、派遣について
極めて厳しい状況で一定の慎重さが求められた
と、このようにおっしゃつておられますし、そう
しつても、今後スピードアップを検討していき

九

第二十二部 政府開発援助等に関する特別委員会 平成二十二年三月十日 【参議院】

まず、感染症の蔓延を抑えていく。あとは、人
口転換も含めて、お母さん、新生児、子供の健康
を守る、もうこの三つ、書いてあるとおりのこと
をやつていけるようにすることが重要なんだと思
つております。

○岡田直樹君 どうもありがとうございます。
次に、富田参考人にお伺いをしたいと思ひ
ます。

大変興味深いガーナでの事例などをお聞かせ
いただき、誠にありがとうございます。ミレニア
ム開発目標達成のために今やODAなどの公的
資金だけでは不足である、不可能であると思つて
おります、民間の資金や企業活動との連携が不
可欠だと思ひますけれども、この分野ではどうも
欧米が先行して日本は少し後れを取つてきた
のではないかと、このように思つておられます
けれども、ソニーさんのように積極的な企業
が出現をして、そこで富田参考人に今日御出席
いただいたということは大変意義深いことだと思
つております。

企業とのいよめるCSR、先ほどお話ししまし
たように、単に企業ブランドを高めるための社会
貢献活動というのではなくて、本業を通じたビジ
ネスとそれから途上国の貧困削減、こういった公
的な要素と、これをいかに相乗的に結び付けて効
果を上げていくかという発想が重要だと私も思
つております。その意味で、いかに効果的な案件
、先ほどのサッカーを見てもらつてそれでHIVの
啓発をするといったような効果的な案件を発掘し
ていくか、それが非常に大きな課題ではないかと
思ひます。

今後CSRを推進されるに当たつて、こういう
プロジェクト発掘という課題にどのように取り組
んでいかれるか、その取組についてお伺いをし
たいと思ひます。また、これに関しまして、今回
JICAと連携をされたわけでありまして、今ほ
ども、JICAなど政府に期待をされる点あるいは
現在不十分と感じておられる点がございました
ら、お教えいただきたいと思ひます。

いというふうな考えておられるわけで、私、今
後、緊急支援についてはなるべく緩やかな指針を
作つておいて、極力迅速に派遣をする必要がある
んではないか。余り手柄争ひのように急いで行く
必要もないわけでありまして、やはり顔の
見える援助、そして日本が現地で感謝される援
助ということを考えますと、やはりある程度の速
速性というものが支援の額といふ量ととも
に求められていると思ひまして、そのことを一つ
この委員会でも申し上げておきたいと思つてわけ
でございます。

ハイチのお話はこのぐらいにいたしまして、ミ
レニアム開発目標の件で引き続き山本参考人にお
願ひをしたいと思いますけれども、私、二〇〇
〇年の九月にニューヨークに行きまして、そのと
きは総理大臣の私設秘書という立場でありまし
けれども、国連ミレニアムサミットを傍聴いたし
ました。あれからもう十年たつたかなと思つて
ありますけれども、そこで採択された国連ミレ
ニアム宣言、これを一つの共通の枠組みにしてミ
レニアム開発目標というものができているとい
うことは皆さん御承知のとおりでございます。

現在、ODA始め国際援助の枠組みとして国際
社会で共通認識になつておるこのミレニアム開
発目標でありまして、日本も結構インシアチブを
取つてきたと思つておられますけれども、先ほど
山本参考人からお話しされたとおり、日本国内で
なかなか認識というか、浸透されていないのが現実
ではないかと、こうも思つておられます。

二〇一五年という期限も迫つてきておりま
し、日本国民の理解それから支持を得るためにど
ういった措置というものが必要であらうかとい
うことを考えておられるわけでありまして、参考
人のお考えがございましたら御示唆をいただき
たいと思ひます。

○参考人(山本太郎君) これは、先ほど日本のO
DAの評価をどういふふうにするか上げることが
できるかといった御質問に対する答えと似てくる
のですが、例えばミレニアム開発目標に関する広

第二十二部 政府開発援助等に関する特別委員会 平成二十二年三月十日 【参議院】

○参考人(富田秀実君) そうですね、まず政府
へ。

今回、JICAさんとタイアップして先ほど御
紹介したようなプロジェクトを進めさせていた
いたんですが、私どもの方では、JICAさんに
限らず、様々な国際機関等とNGOの方々と
連携を常々してこういふプロジェクトを実行し
ているわけですが、特に今回JICAさん
との連携に関して不満なところは決してござ
いませんで、逆に、非常に私として驚きました
のは、JICAさん、新しい今組織体制になりまし
て、民間連携室という組織があつて、これが非常
に積極的に民間、企業との連携のファシリテ
ーションをしていただけたこと、ある意味
で効果的な、効率的なタイアップが今回は非常
に実現できたのではないかなというふうに思つて
おりますので、そういった意味では直接的、今回の
案件に関しても非常にポジティブに受け取つて
おります。

実際、一つ目の御質問の効果的な案件ないし
プロジェクトの発掘、これは非常に意味が難し
い面もありまして、今回のガーナの件に関しま
しては私もソニーの方から、今回のワールドカ
ップというサッカーのコンテンツというのをとら
えて、一種の途上国地域である意味でスポーツとし
ての夢と感動をまず提供したい。このモチ
ベーションが初めにあって、これを実現していく
は、そしてまたさらにこれをどういふふうに行う
まの形で社会開発課題と組み合わせるといふか
というのを逆にJICAさんと御相談させていた
だいて、この議論を通じて最終的にはこうい
ったフレームワークができてきたことになりま
すので、初めからこういふ形が、プロジェクト
の形態がばんとソニーないしJICAさんの方で
あつたわけでは決してありません。

実際、これは非常に意味が深いか、このチャ
レンジなんだと思ひますが、ミレニアム開発目標
の課題にしても様々な課題、さらには様々な地
域、その特有の問題たくさんありますし、企業

側もいろいろ技術リソースですとか様々なシー
ズを持っているわけですが、このマッチ
ングをいかにうまくやっていくかというところが
一つ、今後効果的な案件づくりに欠かせない要素
ではないかと思えます。

多分一人のプレーヤーが、一組織のプレーヤー
がすべてを初めからこれで行くという形で決める
というよりは、それぞれが組織を持つ強みをうまく
持ち寄りながら、その中で調整をして非常に効
果的なものに組み上げていく、こういったある種
仕組みづくりがもしあれば、非常に有意義なこ
とではないかというふうに思っています。

○岡田直樹君 先ほど御指摘のありましたBO
Pビジネスでございませうけれども、金子委員が
おっしゃったダノンのヨーグルトでしようか、そ
れから日本では住友化学がマラリア予防の蚊帳を
作って売っているという非常に興味深い事例もご
ざいます。JICAもBOPビジネスに向けた支
援制度を創設するというところでございませうけ
ども、しかし、途上国の農村地帯で行われる、大変
企業としてはリスクも高い行動ではないかと思
います。

こうしたビジネスの課題や、それがCSRとの
関係、先ほどかなりお話をいただきましたので
簡潔で結構でございますけれども、そうした観点
について御意見を承れば幸いです。

○参考人(富田秀実君) このBOPビジネスに関
しては、やはり今御指摘いただいたように、ビ
ジネスリスクが非常に高いという側面があると思
います。やはりこの中で始めていくに關して
は企業単独で乗り組んでいくのはある意味でハ
ードルが通常のものに比べて高いものではないか
というふうに思います。

そういった観点からすると、私も参画させて
いただきます経済産業省様の支援制度である
と今現在JICAさんの方で検討が進められてい
ると伺っております。支援制度、こういったもの
は意味でリスクの分散という意味で非常に有意
義だと思います。

第二十二部

政府開発援助等に関する特別委員会 平成二十二年三月十日【参議院】

第二十二部

政府開発援助等に関する特別委員会 平成二十二年三月十日【参議院】

評価が現地でも与えられていて、そうした活
動等を支える形の支援もあつてもいいのかなとい
う気はしております。

○谷合正明君 大変ありがとうございます。
私も現地ですつと長年活動されている方にも国
内でお会いさせていただきまして、むしろ、そ
ういう方があつてこそ今回の日本の緊急援助隊が
本場に評価も高く活動できたんだと思いまし
て、両方に私は感謝を申し上げたいわけでありま
す。

次に、富田参考人にお伺いしたいと思ひます。
CSRあるいはBOPビジネスについてであり
ますけれども、やはりODAだけでは今回のMD
Gsの達成に向けては限界があるというの私も
認識を同じにするわけであります。

そんな中で、実は私はNGOで活動してきた出
身の人間として、企業の方との連携というの
が、これができるのであれば非常にNGO側として
も、日本の国内のNGOを含めて、これからの活
動が広がりが出てくるんだと思つております。
これは何も資金面だけじゃなくて、やはりどうし
ても企業さんの方がよっぽど抱える顧客が多かつ
たりという意味では、私は資金量だけじゃなくて
活動にも大きな広がりがあると思つております。
その中で、先ほど参考人の方からも、ただ、そ
うはいつても、NGOといつてもいろいろ規模も
まちまちだし、なかなかすぐに連携といかない場
合もあるという話がありました。

そこで、今後、参考人の方からもパートナー
シップが重要であると、政府、企業、NGOの
パートナーシップと言われましたけれども、この
点について、改めて、特にNGOに対して
の、連携をするに当たつてNGO側に対する要望
であるとか、あるいはそういうパートナーシップ
をつくる上での例えばフォーラムみたいな場が必
要だと思ふんですけれども、今のままだと単体の
NGOと単体の企業、個別で交渉しているような
ものから、その辺、もう少しスムーズにでき
るような仕組みづくりというの必要だと思ふん
です。

平成二十二年三月十七日印刷

義なものではないかというふうに思ひますし、特
にこのBOPのビジネスを展開する地域に対する
アクセスという観点からすると、やはり一企業が
なかなかまだ進出していない場所新しい事業展
開をするということになりますので、その地場
ネットワークを持つているJICAさんのような
組織でありまして、か現地のNGO組織でありま
すとか、そういうところがうまく連携していくよ
うな枠組みというのが非常に大切ではないかとい
うふうに思つております。

○岡田直樹君 ありがとうございます。
もう時間も少なくなつてまいりましたけれど
も、このCSRやBOPビジネスを進めていく上
で、ソニーさんのような大企業だけではなくて中
小企業、日本のいろいろなユニークな技術を持った
中小企業でありまして、あるいは先ほどからも
指摘されておりますけれども、企業とNGOのよ
うな言わば民連連携といったものの活用という
のが非常に重要になつてくるというふうに思つてお
ります。

この辺りの認識について最後に富田参考人の御
意見を承りまして、私の質疑を終わらせていた
だきます。

○参考人(富田秀実君) やはりこういったことを
やっていくには、その中小企業さんが持っている
非常に特殊なノウハウでありまして、かNGOの知
見というのは非常に大事だと思ひます。ただ一
方、特に例えば中小企業さんからよく聞かれます
のは、なかなか比較的小さな企業一社では、ある
種新しいBOPのビジネスの提案まで持つていく
のは非常に難しいというふうな声も率直なところ
よく伺う話であります。

そういった観点からすると、今まで取られてい
るような一種の公募型で、一種の案件を一社な
い何かが完全な形で提案していくという形は、な
かなか中小企業さんなんかにとってはハードルが
高いのかもしれないというふうに感じます。
で、逆に発想を、一種の例えばJICAさんなり
政府機関の方から問題提起型で、こういった課題

ですが、この辺りをちよつと総括的に話をいた
だければと思つております。
○参考人(富田秀実君) この課題は、常々、我々
もいつも感じていたところではあります。最
近、日本のNGOでも非常に積極的な取組がなさ
れつつありまして、特に国際貢献系のNGOさん
がたくさん集つて一種のフォーラムをまさしく形
成している場もございます。その中に企業のメ
ンバーも取り込むというところで、実は私もそ
のフォーラムの中に参画させていただいて、様々
な情報交換や意見交換というのを段階までは
確かに来ているというふうに思ひます。

ただ、そこから更に本当の意味で踏み出してき
ちんとした連携事例をつくっていく、ここが多
分のステップになるのではないかと思ひますが、
集まりますとどうしても議論の焦点がぼやけたり
する傾向が非常にあると思ひますので、これは多
分、企業とNGOの連携もそうだし、例えばJ
ICAさんのような政府機関と企業との連携も全
く同じような問題だと思ふんですが、何かやは
り明確な課題設定がある程度して、それに基づい
て具体的に解決をしていくには、それぞれの組織
が持つ技術、資金面だけでなく、やはり持つ
ていく技術であるとかノウハウであるとかそうい
うところも含めて、どういったものが課題の課題
解決につながるのかという視点でもつてきちんと
議論をしていく、言つてみれば、よく我々の世界
でもオープンイノベーションという言葉が別意
味合いで使つたりするんですが、もう少しそう
いった意味で、ある特定の目的に対して広いパ
ートナーを募つて具体的な話をしていくような、
ファシリテーションができるような場をつくつて
いく、こういうことがあると、その中から、なか
なか時間の掛かるプロセスだと思ひますが、着実
な形で成果が期待できるのではないかなというふ
うに感じます。

○谷合正明君 時間が参りましたので、終わしま
す。
○委員長(石永浩美君) 以上で参考人に対する質
疑を終了いたします。

平成二十二年三月十八日発行

があり、こういったプロジェクトがあるので、
これを例え効果的に展開するにはどういったこ
とが更にできるだろうかみたいな、そういったこ
とを逆にしていただけたら、ある種いろいろな
シーズを企業は多分持つていて思ひますので、
そこでより接点が生まれ、中小企業やNGOの皆
さんにもより参画しやすいような形になるのでは
ないかというふうに思ひます。

○岡田直樹君 どうもありがとうございます。
○谷合正明君 公明党の谷合です。私、最後にな
ります。

今日は、山本参考人、また富田参考人、本
参議院事務局

私から、まず山本参考人に御質問をさせていた
だきます。
まず、ハイチでのこの度の御活動、大変にお疲
れさまであります。私もちよつと地震から一か
月後の二月の十二、十三と現地に行きまして、国
際緊急援助隊の医療チーム、JICAのチームは
もう帰国しておりましたけれども、自衛隊のチ
ームの方にも話をさせていただいたり、現地でい
んな話をさせていただきました。

緊急ステージは、これは当然やらなきゃいけな
いんですが、今後の課題として、この三月三十一
日にニューヨークで、国連でハイチの復興支援の
国際委員会があるわけですが、日本として四千五
百ドルのたしか二国間の支援をもう既に表明し
ているんですが、そこでハイチの中期的な視野に立
ちますと、本日にハイチ政府のガバナンスをどう
していくかという大きな問題を抱えている中で、
どこにこの私たちが日本の税金を使つて援助を集中
していくのかということが求められているのかな
と。ハイチも、もうどの分野もどのセクターもす
べて足りないといった状況でありますから、やは
りそこで日本としてどういった分野にフォーカス
を当てるのか、さらに国際保健の分野としても、
日本の強みという比較優位をはつきりするため
に、どこに今後焦点を当ててやっていくことが大
事なのか。

疑を終了いたします。
参考人の方々に一言ごあいさつを申し上げま
す。
本日は、長時間にわたり大変有意義な御意見を
お述べいただきまして、誠にありがとうございます
しました。当委員会を代表いたしまして厚く御礼を申
上げます。本日にありがとうございます。

(拍手)
本日の調査はこの程度にとどめ、これにて散会
をいたします。
午後二時五十一分散会

私は、今回、ハイチの復興へのかわり方とい
うのが、今回山本参考人からもMDGsに対する
日本国民の認識、日本の認識がまだまだ広がつて
いないということがありますので、このハイチへ
のかかわりいかによつては、まさにこのMDG
sの認識といふものも広げることもできるんだと
思ひますし、やはり一つはその試金石になつてい
ると思つておりますので、その点について御意見
をいただければと思つております。

○参考人(山本太郎君) これもあくまで私的な所
感というか感想なんです。今回、今御指摘もご
ざいましたように、政府のガバナンスが非常に弱
くなつていて、各国がドナー会合をやつて、復
興に向けてかなり大きな資金をつぎ込むことが決
まつていて、その多分状況はすごく歓迎すべき状
況だと思ふんですが、一方で、今回の場合でい
えば、ハイチの援助資金吸収能力というのか、今の状
況で資金だけが大量に投入されても、恐らくそれ
を吸収する能力がないだろうと個人的には思つ
ております。

でも一方で、そうはいつても現場で活動して
いるハイチのNGOというのは確実にあつて、そ
こは草の根的にそうしたNGOがどんどんきて
きている。だから、多分必要なのは、政府のラ
インを通したGGの中からだけで資金を入れて吸
収能力がなくなつちゃう資金を入れるよりも、現
場で活動しているNGOにどういふふうにする資
金を届けていくかという形の援助を日本が模索で
きるというのかなという気はしております。

もう一つの点で、国際保健で何をやるかとい
うことですが、中長期的な復興には、やっぱり先
ほどから出ていますHIVあるいは結核の支援とい
うのが非常に重要なだろうと考えております。
そこには日本の比較優位も私自身はあつたと考
へておりました。そうした支援を行うことは非常に重
要だろうと。

もう一点、ハイチには三十年以上わたつて日
本人のシスターであり医師である方たちの活動が
続いておりまして、そうした活動には非常に高い

参議院事務局

印刷者 国立印刷局

K